

明治 150 年記念 山口県文書館資料小展示 「文書館資料にみる幕末・明治の人・物・文化」

第9回

明治期 華族の日常

「明治」の世を迎え、江戸時代の大名は「華族」となりました。時代の変化に伴って、彼らもこれまでとは違った生活を送ります。

今回の展示では、文書館所蔵の毛利家文庫の中から、これまであまり知られてこなかった明治期の華族の日常を紹介します。

※展示はすべて「毛利家文庫5忠愛公115御奥日記」（以下『奥日記』と略記。）です。

※期間中、展示替えを行います。

1 朝廷とのかかわり

明治4年（1871）の廃藩置県に伴い、元大名（藩主）たちは「華族」と呼ばれるようになり、東京での住居を命じられました。それは彼らに、東京において皇室を支えることが期待されたためでした。

そのため、年始・年末や寒暑の見舞いは勿論、事あるごとにしばしば参内（さんだい。朝廷へ出向き、天皇などへ拝謁すること）をしています。時には夫人を伴うこともありました。

2 つとめ

江戸時代の大名が意外に忙しかったのと同様、華族も忙しい日々を送っていたようです。

毛利元徳の場合、例えば第十五国立銀行（※）の頭取を務め、銀行への「出勤」がありました。右表は明治18年（1885）の1年間に、元徳が第十五国立銀行に「出勤」した日にちと回数です。現在のように毎日出勤していた訳ではありませんが、平均3～5日程度の間隔で、「出勤」していたことが窺えます。「出勤」時間は8時から9時が多く、遅い時には10時に邸宅を出発することもありました。

ちなみに「出勤」は馬車が通例だっ

明治18年毛利元徳の第十五国立銀行「出勤」日

月	日	出勤 日数
1月	6・7・12・17・22・23・29	7
2月	2・9・12・23・24・27・28	7
3月	2・3・6・9・11	5
5月	11・13・18・19・21・22・24・29	8
6月	1・3・8・9・13・17・19・22・29	9
7月	3・6・7・8・14・18・20・24・27・30	10
8月	3・5・10・11・14・17・18・21・25・28・31	11
9月	3・7・9・14・17・19・21・26・28	9
10月	2・3・5・8・12・13・21・26・31	9
11月	2・16・20・24・30	5
12月	1・5・7・11・17・21・24・26・28	9

※3/10～5/5: 山口へ

※11/7から11/14: 群馬へ

「毛利家文庫5忠愛公115御奥日記(19の7)」より

たようですが、「汽車通勤」をしたこともありました。

また明治 22 年（1889）、大日本帝国憲法の制定を受けて設置された大日本帝国議会において貴族院議員となった元徳。翌 23 年に第 1 回帝国議会が召集されましたが、この年の春に大病を患ったため、登院は叶いませんでした。

※第十五国立銀行：明治 10 年（1877）5 月開業。華族の資本により成立したことから「華族銀行」と言われました。

3 山口県とのつながり

旧萩藩主家でもある公爵毛利家。近代になっても山口県との関係は強いものがありました。

まずは旧臣たちとの関係。その多くは明治政府の要職にある一方、公爵毛利家を支えてくれる人々でもありました。年頭の新年祝賀会は勿論、東京を離れる時、あるいは帰京した時には、毛利邸を訪れ、元徳たちに面会しています。また明治 20 年前後には「隔月懇親会」が開かれ、毛利家親族を含めたこれらの人々との交流があったようです。

これ以外には、例えば山口県知事の上京時や、山口県出身軍人の集い（例えば『奥日記』に見える一例に、「陸海軍山口県出身武官廿日会員」があります）など、山口県関係者や山口県出身者との交流が見られます。

加えて、吉田松陰を祀る東京・世田谷の松陰神社には、毎年 11 月 21 日、例祭にあわせて参拝しています（『奥日記』では明治 15 年から明治 22 年までは、元徳自身の参拝か代参の記事が見られます）。

4 諸芸へのたしなみ

近代の華族も諸芸に関心を持ち、たしなみを深めていたようです。

『奥日記』によれば、年間を通して「謡」や「茶事」に時間を費やしていたことが窺えます。「謡」は梅若や観世、「茶事」は中田といった人々に師事し、稽古に励んでいたのです。

また明治 20 年前後は後に「鹿鳴館時代」と呼ばれる、欧化政策がとられた時代でもありました。明治 16 年（1883）に開館した鹿鳴館では勿論、親しい華族の邸宅で開催される舞踏会などへの参加も見られます。もっとも『奥日記』においては元徳の舞踏会への参加はあまり見られず、夫人の安子や富子（元昭夫人※）などが主でした。彼女たちには西洋流のダンスの素養も求められたことでしょう。

なお諸芸ではありませんが、富子は明治 19 年、通学中の華族女学校に対し英語の授業を受けたい旨の願書を提出しています。近代を生きる華族の女性として、英語の習得が求められたのかもしれませんが、これも新しい時代を感じさせる一面です。

※富子：尾張徳川家の徳川慶勝（侯爵）の女。明治 3 年（1870）の生まれで、明治 25 年に離縁しています。彼女は後に子爵の戸田康泰（やすひろ）に再嫁します。明治 42 年没。

5 催し・会合

元徳の「仕事」には、催しや会合に出席することも含まれていました。会合としては、「3 山口県とのつながり」で紹介したケースのほか、同じ爵位の人々や、江戸時代に 10 万石以上を有していた旧大名家の人々との懇親会にも出席しています。

また、日常から離れたイベント的なものも含めれば、上野で開かれた様々な展覧会や、サーカスの見物、陸海軍の軍事演習にも足を運んでいます。

明治 20 年代からは、夫人・毛利安子の活発な活動も見られます。例えば、先月の当館資料小展示「万国博覧会参加の記録－1893 年シカゴ万博－」で紹介したシカゴ万国博覧会（明治 26 年＝1893 年）へ日本が参加するにあたり、安子は日本婦人委員会委員長に就任しました。『奥日記』からは、日本婦人委員会への出席や、アメリカからの来賓の応接など、安子の委員長としての活動が窺えます。

6 楽しみ

季節ごとの楽しみには、観梅・観桜・観菊をはじめ、牡丹、バラ、花菖蒲、紅葉などの鑑賞がありました。これらはその名所に足を運ぶこともありましたが、親しい人々に招かれ、庭園で共に楽しむものもありました。勿論、毛利邸で鑑賞会が催されることもありました。

また、銃猟も楽しみの一つでした。東京近辺では砂村（現東京都江東区）や深沢村（現東京都世田谷区）などが主な猟場で、時には泊まり込みで楽しんでいました。現在の東京 23 区周辺にとどまらず、埼玉県にまで足を伸ばすこともありましたが、銃猟には一人（勿論お付きの人はいます）で行くこともありましたが、旧福岡藩主で侯爵の黒田長濶(ながひろ)とは趣味が一致したのか、連れ立って出かけています。

さらに元徳は、釣りにも関心があり、近隣の品川では時々釣り糸を垂らしていました。明治 23 年（1890）には鎌倉に別邸を入手し、ここでの長期逗留の傍ら、海へ釣りに出かける日々を送っています（※）。ただし、これは元徳の健康上の理由もあったように思えます。

※毛利元徳と海については、第 12 回中国四国アーカイブズウィークで開催した当館のアーカイブズ展示「防長と海－その記録と記憶－」で紹介しています。現在では当館のウェブサイト中の「アーカイブズウィークの展示解説シート・リーフレット」で御覧いただけます。下記を御参照ください。

http://archives.pref.yamaguchi.lg.jp/user_data/upload/File/umi21.pdf

展示期間

	9/29～10/10	10/11～10/23	10/24～10/30
1 朝廷とのかかわり	①明治11年1月1日条		⑩明治27年9月13日条
2 つとめ	②明治23年11月29日条	⑥明治17年1月7日条	
3 山口県とのつながり	③明治15年11月21日条		⑪明治19年1月18日条
4 諸芸へのたしなみ	④明治19年9月27日条	⑦明治19年7月9日条	
5 催し・会合	⑤明治18年5月30日条	⑧明治25年11月5日条	
6 日々のたのしみ		⑨明治23年4月8日条	⑫明治23年2月22日条

※数字は展示資料の番号です。

今回の展示で使用した「毛利家文庫 5 忠愛公 115 御奥日記」（以下、『奥日記』と略記。）は、毛利元徳に関する文書・記録を集めた毛利家文庫の「5 忠愛公」に含まれる資料です。目録のタイトル「御奥日記」や、右表にまとめた原初表題からもわかるように、『奥日記』は「公（おおやけ）」である「表（おもて）」とは対照的な、プライベートな場における「奥」での日々の出来事がつづられました。そのため、公爵毛利家の当主である元徳に関する記事のみならず、夫人である安子、元徳の子供達、さらには元徳の跡を継ぐ元昭の夫人・富子の活動までも記されています。

『奥日記』は明治 11～30 年まで、1 年 1 冊の 19 冊で構成されています（明治 14 年は欠本）。これは、毛利元徳に関する記録を集めた「5 忠愛公」に含まれる関係もあって、彼の死去する明治 30 年で区切られたと考えられます。しかし、元徳の死去後も残された夫人・安子の生活を記した記録が作られます。それは「毛利家文庫 53 女儀日記 6 常盤御殿御後室様付」（全 27 冊）で、彼女の活動を知る一助となる記録です（※）。

なお、明治 10 年代後半以降の元徳は、鎌倉や熱海など、東京から離れた地に長期滞在することが増えました。これは、鉄道に代表される交通網の整備、海をはじめとするリゾート地の開発などのほかに、明治 23 年、元徳が長期間体調を崩したことが契機となったと考えられます。そのため『奥日記』とは別に、その道中や滞在地での記録が作成されました。例えば「毛利家文庫 5 忠愛公 116 元徳公御旅行日誌」（全 3 冊）はそれに該当するものです。

こうした日記類をはじめ、残された様々な資料を読み解くことで、あまり知られていない明治期の華族の一側面を窺い知ることができるのです。

※毛利安子に関する日記は、「毛利家文庫 53 女儀日記 4〔宝印御右筆間〕御日記」、「同 5〔宝奥御奥方様付侍女〕御日記」などもあります。

「毛利家文庫5忠愛公115御奥日記」原初表題

番号	年代	原初表題
(19の1)	明治11	明治十一年日記 御奥
(19の2)	明治12	明治十二年日記 家扶座
(19の3)	明治13	明治十三年一月ヨリ 御次雑事録 御奥
(19の4)	明治15	明治十五年一月ヨリ 日誌 御奥
(19の5)	明治16	明治十六年癸未一月ヨリ 日誌 御奥
(19の6)	明治17	明治十七年甲申一月ヨリ 日誌 御奥
(19の7)	明治18	明治十八年乙酉一月ヨリ 日誌 御奥
(19の8)	明治19	明治十九年丙戌一月ヨリ 日誌 御奥
(19の9)	明治20	明治二十年丁亥一月ヨリ 日誌 御奥
(19の10)	明治21	明治二十一年戊子一月ヨリ 日誌 御奥
(19の11)	明治22	明治二十二年己丑一月ヨリ 日誌 御奥
(19の12)	明治23	明治二十三年庚寅一月ヨリ 日誌 御奥
(19の13)	明治24	明治廿四年一月ヨリ 日誌 御奥
(19の14)	明治25	明治二十五年一月ヨリ 日誌 御奥
(19の15)	明治26	明治廿六年一月ヨリ 日記 御奥
(19の16)	明治27	明治廿七年一月ヨリ 日誌 御奥
(19の17)	明治28	明治廿八年一月 日誌 御奥
(19の18)	明治29	明治二十九年一月 日誌 御奥
(19の19)	明治30	明治三十年一月 日誌 御奥